

## 佳作

### 私のチャレンジ

宮城県登米市立中田中学校

3年 阿崎 大和

「このままでいいのだろうか。」

私は、部活動を頑張りたいという一心で、学区を変更してまで中田中学校に入学した。そして、念願のバドミントン部に入部した。一つ上の先輩方に憧れ、「先輩たちと共に良い結果を残したい、たとえ結果が出なくても自分自身を変えたい」と強い意気込みを持って練習に励んでいた。練習は非常にハードだったが、仲間と声を掛け合い、励まし合いながら、必死に上を目指す先輩たちの背中を追いかける日々は充実していた。そのため、1年生から2年生の前半にかけて、私のバドミントンへの情熱は入学時より一層高まっていったのだ。

しかし、私の心はそこまで強いわけではなかった。2年生の後半に転機が訪れた。それは先輩たちの引退であった。部活動でもプライベートでも、共に笑い、つらいことを乗り越えてきた先輩たち。私は彼らに完全に頼り切っていた。その信頼する先輩たちが部活動からいなくなってしまうことで、私の中学校生活の歯車は狂い始めた。

その頃、追い打ちをかけるように、クラスでの人間関係にも悩まされるようになった。クラスメートから、わざと私に聞こえるように「あいつ、うるさくない?」「きもっ」などと陰口をたたかれるようになったのだ。そうした心ない言葉は、日に日に私の心をむしばんでいった。これまでは、仲の良い先輩たちと関わることで、精神的な支えを得ていたが、それもなくなってしまった私にはつらい日々となった。

そうして月日が流れ、いよいよ私たちが部活動の主体となると、部の士気は先輩たちの代とは比べものにならないほど低下し、顧問の先生の指示さえもすぐに行動できない状態に陥ってしまっていた。そんな中、「自分だけは違う」「自分さえしっかりしていれば、いずれ皆もついてきてくれるはずだ」と気持ちをふるいたたせようとした。しかし、良くも悪くも人は周りに流される生き物なのだ痛感した。上がらない士気に引きずられるように私の気持ちも落ち込んでいき、真剣に退部を考えるまでになった。

それでも、私は副部長であり、チームの戦力であるという自覚もあった。辞めたくても辞められない状況に追い詰められ、前部長であり親友でもあった先輩に相談した。「周りのやる気がなくて、俺も流されそうなんだよね。もう部活を辞めたいんだ。」と。ふざけた返事が返ってくるかと思っていたが、先輩の言

葉は真剣だった。「そうか。でも、続けたい気持ちが少しでもあるなら、残された時間は少ないんだ。副部長としてやるべきことをやり、自分の役割をしっかり果たしてみたらどうだ？」と。

私はその言葉に、はっとさせられた。悩みが軽くなると同時に、部を引っ張らなければならないという責任感が湧き上がってきた。そうだ、私は本当はバドミントンを続けたいのだ、なんだかんだ言っても、今までずっと打ち込んできた。もしバドミントンをしていなかったら、憧れの先輩たちや、本気で叱ってくれる先生に出会うこともなかっただろう。

その日を境に、私は部を立て直すために行動を始めた。まず、同級生の男子部員たちと真剣に話し合い、「まずは自分たち4人が手本を見せることで、周りを引っ張っていこう」と、決意を固めた。私たちの所属するバドミントン部は、特に礼儀や挨拶といった「人間力」を重んじる部活動だ。そこで、顧問の先生が体育館に入ってこられた際の挨拶をみんなで徹底したり、ダッシュのような厳しい練習では自ら声を張り上げて雰囲気盛り上げたりした。すると、部は以前よりもずっと良い雰囲気に変わっていった。

もちろん、チームの実力は先輩たちの代には及ばず、伸び悩んだ時期もあった。そんな時、顧問の先生がこうおっしゃった。「結果が出ないから駄目というわけではない。部活動を引退した後に、ここで学んだことをこれからの人生にどう生かせるか、そのことを大事にしてほしい。」と。

私はこれまで、結果が出なければ意味がないと思い込んでいた。しかし、この言葉を聞いて、結果以上に、人としての礼儀や諦めない心といった大切なことを、この部活動を通して学べたのだと気づくことができた。

これからは、部活動から受験勉強へと挑戦の舞台が移っていく。そして、これからの人生は中学校生活よりもずっと長い。だが、この中学校の部活動で得た経験と学びを糧に、これからもさまざまなことに挑戦していきたいと、強く思っている。